

まくらのそうし
枕草子 第一段

せいしょうなごん
清少納言

春は、あけぼの。

やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、

むらびき
紫だちたる雲の、細くたなびきたる。

夏は、夜。

月のころは、さらなり。

やみ
闇もなほ、

ほたる
螢のおほく飛びちがひたる、

また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りてゆくも、
をかし。

雨など降るも、をかし。

秋は、夕ぐれ。

夕日のさして、山のはいと近うなりたるに、

鳥の、寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ、三つなど、

飛びいそぐさへ、あはれなり。

まいて、雁などの列ねたるが、

いと小さく見ゆるは、いとをかし。

日入りはてて、

風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

冬は、つとめて。

雪の降りたるは、いふべきにもあらず。

霜のいと白きも、

また、さらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、

炭もてわたるも、いとつきづきし。

昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、

火桶の火も、白き灰がちになりて、わろし。

枕草子 第二段

ころは、

正月、三月、四月、五月、

七、八、九月、

十一・二月。

すべて、をりにつけつつ、

ひとつとせながらをかし。